

学校給食用米を育む田んぼを調査 ～学校給食用米関係者が交流～

J A全農かながわは、7月5日、水田の多面的機能や県産米を学校給食で利用する意味について理解を深めてもらおうと、J Aかながわ西湘の協力を得て「学校給食用米 田んぼの生き物調査」を初めて開催した。地元の小学生を含む親子25名や県学校給食会職員らが、小田原市成田で学校給食用米を育てている田んぼに集まった。全農本所職員が講師となり、お米を食べる事が田んぼや生き物を守ることにつながる事や、田んぼの生き物調査の進め方を説明した。参加者は網と捕獲用の容器を手に田んぼに入り、泥に足をとられながらも、約15種類の田んぼの生き物を採取した。田んぼから上がった後は、捕まえた生き物の名前を講師がボードに書き出すと、子供達は配布された「田んぼの生き物図鑑」を手に、熱心に観察した。9歳と5歳の兄弟と一緒に参加した母親は、「ヤゴ、カエルなど、子供達が普段出会えない田んぼの生き物とふれあえる貴重な機会になった。子供たちはごはんが大好きなので田んぼに入る経験ができて良かった」と喜んだ。別の家族からは「子供達は昆虫に興味がある時期で、夢中で田んぼの生き物を探していた。（生き物を元の場所に返すと聞き）まだ名残惜しそう」と振り返った。



「どんな生き物が住んでいるかな？」
学校給食用の田んぼで生き物を探す子どもたち



普段出会えない田んぼの生き物を、
夢中で観察する子どもたち

(公財) 県学校給食会物資課の黒岩氏は、「小雨の降る中でも、子供達が積極的に田んぼの生き物調査を楽しんでいた様子で良かったと思う。学校給食用米は全量県産米を利用したいが、現在玄米で約2800トンの年間使用量に対し県産米利用見込み量は約1980トン(26年産ベース)で、不足分は他県産に頼らざるを得ない状況だ。全量県産米を利用できるよう、J Aグループ神奈川には期待している」と話した。

全農かながわでは、県下J A、県中央会と連携し「学校給食用米確保運動」に基づく集荷対策を行っていく。